

ブルーノ・シュルツとの出会い



加藤 有子

私のポーランド研究はブルーノ・シュルツとの出会いに始まる。修士論文のテーマを決めかねていたころ、大学生協の書籍部に平積みされた『ブルーノ・シュルツ全集』に目を留めた。函入りの立派な装丁の二巻組で、値段も一万五千円を越えた。最初は図書館から借りて読んだのだろう。頁を繰ると、知っている風景、記憶している像がそこにあつた。目の眩むほどの八月の陽光、炎暑とひんやりした日陰のコントラスト、漆黒の夏の夜の空、冬の室内に充満する熱い空気、疾風吹き抜ける冬のまだ暗いなかの朝の会話。精確には自分の知っている像や風景ではなかった。自分の知っている感受体験、感受の方法と過程をすでに誰かが小説というメディアで再現していた。旧オーストリア領ガリツィア地方、當時はポーランド領だったドロホビチ（現ウクライナ）という土地で。

ブルーノ・シュルツという名前に出会うのはこれが二度目だった。大学一年の冬、もう暗くなった五限の大教室の授業で、クエイ兄弟の人形アニメーションフィルム「ストリート・オブ・クロコダイル」を見て衝撃を受けた。コピーで配布されたVHSのタイトルパッケージには小さな文字で原作ブルーノ・シュルツ「大鰐通り」とある。図書館の検索システムでいくら探しても見つからない。工藤幸雄による日本語訳は一九六七年には出ていたが、文学全集に収録されていたため、フルネームの著者名ではヒットしなかったのだろう。「大鰐通り」も短編のタイトルであり、書名検索では出てこない（英語版のシュルツの短編集は『大鰐通り』*Street of Crocodiles*をタイトルに、この名で知られる）。数年の時を経

て、思いがけずブルーノ・シュルツが像を結んだ。シュルツ研究のためにポーランド語を始め、博士課程進学後にポーランドに留学し、本格的な研究が始まった。

ブルーノ・シュルツ（一八九二—一九四二）は一九三〇年代に二冊の短編集『肉桂色の店』（一九三三）、『砂時計サナトリウム』（一九三七）を出したユダヤ系ポーランド語作家である。短編は生地ドロホビチと思しき小都市を舞台に、一人称単数の語り手である少年ユーゼフと布地商を営む父ヤクブの物語が、明確なプロットなしに奇想天外に展開する。言語は濃密なうねりとなって枝葉を広げ、一語の無駄もなく緊密に関連してメタファーを織りなす。子供の視点がとらえた情景が色彩はもろろん、湿度や空気の揺らぎ、触感、音、匂いで複層的に圧倒的強度で立ち上がる。外の世界から切り離された家という閉じた空間が無限の小宇宙に変換されて広がる。

シュルツとその小説に重要な意味を持つのが幼年時代だ。「決定的な意味を持つある種の諸イメージに、幼年期のわたしたちがどのようにしてたどり着くのかはわからない。こうしたイメージが溶液の中に浸された細い糸のような役割を果たし、自分にとっての世界の意味はその糸の周りに結晶していく。」「わたしの考える芸術とは後退、回帰する幼年時代だ。（……）わたしの理想は幼年時代に向かつて『成熟』すること。同年のベンヤミンにもどこか共通する幼年期の記憶と感受を核とする短

編は、地域や時代を超えて人の記憶の髄を震わせる。二十世紀初頭のどの芸術潮流にも還元されず、単なる不条理や幻想小説にもくくりきれないシュルツの作品は、すでに四十ほどの言語に訳され、「ポーランドの」という限定詞なしに世界の二十世紀文学に確固たる位置を占める。クエイ兄弟を筆頭に映画化、演劇化も多く、ユーゴスラヴィアのダニコ・キシュや現代アメリカのステイヴン・ミルハウザーのような作家にも影響を与えた。チェコの作家ボフミル・フラバルもシュルツのファンであることを公言していた。

シュルツはポーランド文学という一つの領域にとどまらない広がりを持つ。シュルツからの研究テーマが複数枝分かれしていく。

第一に、作家であり画家であった。作家デビューに先立つ一九二〇年代には画家としても活動し、マゾヒストさながらの身振りで女性を偶像化し崇拜する男たちを主題にクリシェヴエールの連作『偶像賛美の書』をまとめた。十九世紀フランスのバルビゾン派に知られるクリシェヴエール(ガラス版画とも訳されてきた)という稀な技法が二十世紀初頭の東欧の辺境に現れた点でも注目される。版画と写真の中間的技術であるクリシェヴエールによる「描く／搔く」書であることが私の研究のなかで重要な意味を持つていく。二冊目の短編集には自身で描いた挿絵を入れた。従来、シュルツは小説家として評価され、画業はマゾヒスティックなモチーフを中心に、小説とのモチーフの類似や作家の性格を推測するうえで参照されるにすぎなかった。残された短編はおよそ十年ほどの短い期間に書かれ、形式も舞台も登場人物も似ている。それゆえ、短編の時系列的な展開を見ることも、ジャンル横断的に画業も含めてとらえる視点も欠けていた。単著『ブルーノ・シュルツ——目から手へ』(水声社)にまとめた博士論文は、シュルツの絵画と文学を有機的な発展系としてとらえる初の試みだった。

シュルツという対象が関心を引いたのは、第二にその伝記的背景である。ユダヤ系だったシュルツは一九四二年、ナチス・ドイツ占領下に

入った生地ドロホビチのゲットーの路上でSS将校に射殺された。私は卒業論文で、クロード・ランズマン監督の九時間半の証言ドキュメンタリー映画『シヨア』(一九八五)を扱い、ホロコースト表象の問題を論じた。日本では戦後五十年にあたる一九九五年に公開され、当時、実名の証言者II被害者が現れて忘却から呼び戻された「従軍慰安婦」問題ともリンクして、学術的、社会的に大きな議論を呼んだ映画である。この映画はアウシュヴィッツの陰で忘れられかけていた、ポーランドの地に作られたその他のナチスの絶滅収容所を忘却から救いだした。東欧ユダヤ人、記憶と芸術は大学院進学時からの漠然とした研究対象であり、何を材料に論じるかが決めきれずにいたときに出会ったのがシュルツであった。東欧のユダヤ人であり、ホロコーストの犠牲者でもあるシュルツはその伝記的面からも関心を引いた。

第三に、その文化的混交性である。ポーランド文学史に名を残すシュルツが生まれたとき、ポーランドは三分割下にあり、地図上にはなかった。生地ドロホビチはオーストリア領にあり、オーストリアがポーランドから獲得した北東の辺境地帯ガリツィア地方に属した。同化ユダヤ人の布地商の家に生まれたシュルツはポーランド語とドイツ語を話し、東欧ユダヤ人の民衆言語であるイディッシュ語は知らなかったとされる。執筆言語もポーランド語だった。第一次世界大戦後にポーランド領に入ったドロホビチで、地元のギムナジウムに美術教師として勤務しながら執筆した。現在の国境線に基づく国や言語、民族といった単一の枠ではとらえられない文化的背景を持つ作家なのである。

私が学部時代を過ごした美学芸術学専攻、とりわけ大学院時代の表象文化論専攻では、領域や芸術ジャンル、記述言語によって限定されない視野が要請された。シュルツをはじめ、その周辺のテーマは国や言語やジャンルという枠を超え、領域横断的な視点からアプローチすること、これまでとは違った見え方をすると思われるものばかりだった。

シュルツの生きた、リヴィウ(ドイツ語でレンベルク、ポーランド語

でルヴフ)を中心とするポーランド・ウクライナ国境地帯は歴史的にガリツィアと呼ばれ、第二次世界大戦まではポーランド人、ウクライナ人、ユダヤ人を主たる構成員とした文化的、言語的、宗教的な混交地帯として知られる。第二次世界大戦中、ソ連とナチス・ドイツに占領され(このときシュルツは殺害され)、戦後は国境変動により東側はソ連ウクライナ領となった。ホロコーストや戦後の強制的な人口移動によって、ポーランド人はポーランド領に、ウクライナ人はウクライナ領に移され、一帯の宗教施設は荒廃し、かつての文化的混交性は消えた。

研究を進めるうちに、両大戦間期にシュルツの知人たちが中心となつて、東と西のはざまの多文化地帯ならではの前衛芸術を辺境のガリツィアで作りに出そうという美術やイディッシュ文学のジャンル横断的動きがあったが見えてきた。しかし、戦後に国境で分断された同地の動きは、国や言語、ジャンル別の研究のなかでその総体がとらえられずにいた。

一方、ソ連崩壊と東欧の体制転換、EUの東方拡大の流れのなかで、ソ連型社会主義国と同義に使われた「東欧」という枠を取り外し、同地域の文化的共通性を「中欧」という枠組みで捉えなおす研究が盛んになる。そうした「中欧」モダニズム再考の流れでも依然として見落とされてきたのが、リヴィウを中心とするガリツィアであった。リヴィウという都市に起きた前衛的運動を世界的視野で捉えなおすことで、「中欧」の文化地図を再考できるのではないか、というのが私の現在の研究テーマの一つである。

すでに主流にあるものではなく、それによって見えなくなっている辺境的なものにこそ面白みを感じる。

博士課程進学後、初めてポーランドに留学した二〇〇〇年は、東欧の体制転換から十年ほどしか経っていないから。文学や芸術の価値評価や研究に政治的バイアスや制約のある時代が終わってから、それほど時間が経っていない。シュルツをはじめとする前衛文学は戦後は一時発禁に

なり、研究が本格化するのには体制転換直前の一九八〇年代頃からである。ガリツィアはソ連が崩壊し、ウクライナが独立した一九九〇年代以降から旬の研究テーマになっていた。イディッシュ語文学の本格的研究も始まりつつあり、私はワルシャワでイディッシュ語を学んだ。ポーランド人のユダヤ人集団殺戮への関与を明かし、ポーランドの加害の面を問う議論の端緒となったイェドヴァブネ事件を告発するヤン・グロスの書物『隣人たち』の刊行は二〇〇〇年。さまざまな研究の流れを同時代的に追うことができたのは幸いだった。

博士論文執筆のため、ワルシャワ、クラクフで計四年半を過ごしたポーランド留学では、各地の美術館や個人所蔵のシュルツの絵画作品を含め、一次資料、二次資料を徹底的に探して読んだ。二〇一二年頃までのシュルツ研究はほぼすべて網羅したことはその後も生きている。面白いと思う研究の筆者には会いに行つた。マイクロフィルムをひたすら回して雑誌や新聞の全号に目を通すことも歴史研究の友人から学んだ。調べるもの、やることは尽きせず出てきた。学会に報告者として参加するようになり、ある時から次々と扉が開くように世界が広がっていった。二〇一二年からはシュルツの国際誌『フォーラム・シュルツ』の企画編集委員に名を連ねる。十数年という時間的塊を投じることで、一つの主題の専門家になりえたという実感がある。

私の世代は博士論文には十年かけるものと言われていた。教員や学生の専門領域もジャンルも対象言語も地域も様々ななかで、何をどのように研究するか、「研究」と一口に呼ばれるものが何かを自分なりにある程度定めるまでに長い時間がかかった。とりわけ文学のように言葉で書かれたものを論文という言語的構築物に再度還元することの意味と、それを学問として成立させる要件や方法について考える日々だった。

ジャンルを限定せずに広義に芸術をとらえ、作品の生成過程や創作の原理、文化的系図の広がりや明らかにすること、そのために一次文献、二次文献や周辺資料を徹底的に調査し、あるいは時間や場所を越えた類

似のモチーフを見つけ出して引き合わせ、大多数にはば納得のいく推論を立て、論理的に記述することをひとまず研究の目的、方法として設定するに至った。言語的構築物としての論文というジャンルの可能性についても考えた。

シュルツという選択は、自身の研究目的にかなうものを直観的に先取りした結果とも言えた。旧約聖書に現れるヤクブ（ヤコブ）とユーゼフ（ヨセフ）を中心人物に設定しているように、その短編には古今のヨーロッパの文学や美術の周知のモチーフが自在に織り込まれ、美術では制度や規範が部分的に取り入れられてずらされ、新しい物語が生み出される。当時、作家が知っていた、読みえた、認識しえた文学とイメージを探索し、照合することで、読みの可能性が広がるのがシュルツの作品だ。裏を返せば、読み手の知識次第でシュルツというプリズムは発する光を変え、増し、見たことのない光線を現す。自身の成長や老いとともに新しい面を見せるシュルツの作品とは、一生つきあい続けるだろう。

二〇一六年の夏、葉山で開かれたクエイ兄弟の展覧会オープニングで、クエイ兄弟に会うことができた。シュルツのこと、紹介してくれたポーランドの共通の知人のこと、シュルツの日本語訳者工藤幸雄氏のこと。話は尽きず、帰国後もメールであれやこれやシュルツをめぐる長いメールをやり取りした（一卵性双生児の二人のメールは二つのメールアドレスからそれぞれ全く異なる文体で届くのだが、どれも複数形のQ&Aや双子とサインされていた）。シュルツを共通項に思わぬところで、世界中に知り合いの輪が広がっていく経験が続いている。二〇〇四年からは二年に一度、ウクライナのドロホビチで国際シュルツ・フェスティバルがまさに祝祭的に開かれている。シュルツは人をつなぐ、というのはシュルツに携わるひとびとが交わす決まり文句だ。

二〇一六年九月から一年間、海外共同研究の研究費を得て、再度ワルシャワに研究滞在している。今回のテーマは卒業論文以来のホロコーストであり、ポーランドの文学、美術、公共空間におけるその記憶のかた

ちの変容をジャンル横断的に追うものだ。最初の留学から十五年ほどの観察を経て、一通りの流れが見えてきて、今がこのテーマに着手するタイミングと思えた。所属先のポーランド科学アカデミー文学研究所にはホロコースト研究センターがあり、社会学、歴史学、文学、美術等さまざまな領域からの研究が行われている。これまでとは異なる研究者のコミュニティに入ることで、新しい人に知り合う緊張感と楽しみがある。何より、ポーランド文学の具体的タイトルをあげて細部まで語り、それに対して反応と示唆が得られることに高揚する。当初のアイデアもより具体化し、ワルシャワ・ゲットーというトポスと写真と文学を中心に研究を始めつつある。

共同研究者が私に好奇心から尋ねたのは、日本におけるホロコーストの受容、日本における戦争の記憶であった。こうした会話に背中をおされ、日本における戦争の記憶との比較というまだ先と思ったテーマにも着手している。周囲の研究者は次々読みこなし、どしどし書く。社会で起きていることにも敏感に発言していく。街では一般に開かれたトークイベントや映画上映の企画が毎週のようにあちこちで開かれる。研究のパワーやリズムを感じられる心地よい大きさのワルシャワに過ごす日々を大事にしたい。

在外研究は自分の普段の場所を改めて外から見つめなおす機会でもあろう。ポーランドでは女性の研究者、教授、トップが当たり前にいる。「女性」という限定詞なしに知性やイニシアチブを当たり前前に発揮する場があり、当たり前前に受け入れられる。博士課程進学後すぐに目にしたこの光景は、その後の研究の姿勢の支えにもなった。日本ではリベラルであろう大学でさえ、女性の教授は圧倒的に少なく、モデルが少ない。女性を「副」に置いてよしとする「女性の登用」（登用する主体は誰か？）ではなく、「紅一点」や「場の華」という（男性が多数者ゆえの）社会の発想を超えて、男も女もなく当たり前前に能力を全開にして相応のポストを得て、当たり前前に振る舞う光景は間もなく日本にも定着するだろうか。

（かとう ありこ）